

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6 月 3 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20520611

研究課題名（和文） 「海の人事録」にみる近代オスマン帝国社会の変容

研究課題名（英文） The Social Changes in the Modern Ottoman Empire
as seen from the Marine Personnel Records

研究代表者

小松 香織（KOMATSU KAORI）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：10272121

研究成果の概要（和文）：本研究は、オスマン帝国において海洋活動にたずさわった人々のパーソナルヒストリーを、人事関係等の史料を分析することにより集積し、近代オスマン帝国の社会構造を見直そうと試みたものである。結果、オスマン帝国末期に海事に関わった人々の出自（民族、宗教、出身地、社会階層等）、キャリアパターンについて、一定の法則性を見出し、海事における黒海沿岸出身者の重要性が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research aims to reconsider the Ottoman social constructure by means of analyzing personal histories of these who engaged in maritime activities. As the source we used various data from the marine personnel records. As a result, we found a set of tendency of their background (nationality, religion, birth place, social status, v.s.) and career patterns, and made clear the importance of personals of the Black Sea region by origin in marine activities of the late Ottoman society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：西アジア・イスラーム史・オスマン帝国・近代・海運・海軍

1. 研究開始当初の背景

本研究の特色は、オスマン社会の構造を、「集団」ではなく「個」の集積としてとらえ、パーソナル・ヒストリーを積み重ねることによって、最終的に社会の全体像を描

き出そうと試みる点にある。これまでのオスマン社会史研究は、特に近代史においてその傾向が見られるが、ある集団へのアイデンティティというものに主たる関心がは

らわれてきた。その結果、ムスリム対非ムスリム、守旧派對改革派といったような、集団と集団との対比の構図は鮮明に浮かび上がったが、それぞれの集団を形成する個々人の存在は等閑視され、ムスリムであれ、非ムスリムであれ、「民衆」や「大衆」ということばでひとくくりにされがちであった。そこで、こうした人々の「暮らし」や「しごと」に光をあて、後期オスマン社会を、従来とは異なるミクロの視点から考察するために、これまでの研究成果（「近代オスマン帝国社会にみるエスニシティと地域性」(平成 16-19 年度科学研究費補助金基盤研究(C))に立脚し、オスマン帝国期の海軍・海運関係の人事記録に関わる様々な史料を収集し、データ・ベースを構築して当該研究をさらに発展させることを企図した。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、オスマン帝国後期の海軍や海運など海事にたずさわった人々の出自(民族、宗教、出身地、社会階層等)を新たに発掘した人事関係等の史料を分析することにより明らかにし、近代オスマン帝国の社会構造とその変容を「ヒト」を核として見直そうと試みるものである。また同時に、こうした作業を通して当該史料のオスマン帝国社会経済史研究史料としての重要性を提示する。

(2) トルコ近現代史研究は、アタテュルクの祖国解放運動を「革命」と位置づけ、オスマン帝国からトルコ共和国への歴史の流れを、多民族国家からトルコ人の国民国家へ、イスラーム帝国から世俗的な近代国家へと、ラディカルな変貌を遂げたときみなしてきた。しかし、近年オスマン帝国末期とトルコ共和国との連続性が注目されるようになった。本研究は、エリート層のみな

らず、「民衆」の間にも「革命的な」変化を受けとめる素地がすでにできあがっていたことを、パーソナルヒストリーの集積から示すことで連続性の議論に寄与することをめざす。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、オスマン帝国において海洋活動にたずさわった人々のパーソナルヒストリーを明らかにし、近代オスマン帝国の社会構造を「ヒト」を核として見直そうと試みるものである。この目的を達成するために、海軍、海運関係者の人事に関する史料群をとりあげ、それぞれについて「ヒト」の記録を出来るだけ丁寧に掘り起こす作業を行った。

(2) 収集した史料は所蔵機関別に以下のとおりである。

①トルコ共和国首相府オスマン朝文書館所蔵の『船舶通行許可台帳』: 18世紀末から19世紀前半に帝都イスタンブールのボスフォラス海峡を通過した商船の船主、船長、乗組員に関する情報を得ることができる史料で、これにより、近世、すなわち近代汽船海運時代以前の伝統的な帆船海運におけるムスリムと非ムスリムの役割を知ることができる。

②イスタンブール海軍博物館所蔵の『人事記録台帳』: 19世紀中葉以後のオスマン海軍軍人の個人データが書き込まれた膨大な史料である。すべてを閲覧することは不可能であるが、出身地、キャリアパターンなどに焦点を絞って統計的数値を導き出し、海軍の人材登用にみられるエスニシティや地域性の特徴を明らかにする。

③トルコ海運公社総合史料室所蔵の『給与台帳』や人事・年金支給関係書類: 本研究で最も重点を置く史料群である。研究の目

的ににおいて述べたように過去の研究において申請者自身が発掘し、データ・ベース化した『給与台帳』をはじめ、これまでほとんど学術研究に利用されてこなかったこの史料群によって、オスマン帝国内の汽船海運に独占的なシェアを占めていた官営汽船会社「特別局」の人的構成の実態を解明する。

④アタテュルク図書館所蔵のオスマン語新聞・雑誌：オスマン帝国末期の海事関係記事を集めて検討することにより、世論の動向から民衆の思考の変化を読み取る。

(3) (2) で収集した史料をデータ・ベース化し、内容の分析・考察を行った。

4. 研究成果

(1) オスマン帝国末期の海洋活動における黒海沿岸民の重要性

本研究により、黒海沿岸地域がオスマン帝国末期の海軍と海運に多くの人材を供給していたことが、当該事象に関するさまざまな史料の分析を通して明らかとなった。

主要な史料として、海運関係ではオスマン帝国期の官営汽船会社の個人記録文書、『給与台帳』から、汽船乗組員の出自、特に出身地に関する情報を抽出し、データ・ベース化することによって、約半数が黒海沿岸地域出身者であることがわかった。海軍については、『人事録台帳』、『海軍年鑑』、『海軍公報』の記録から海軍軍人の出身地に関する情報を収集した。その結果、士官・将官級のエリート軍人は圧倒的に帝都イスタンブル出身者が多いとはいえ、下士官、水兵クラスでは海運同様黒海沿岸2州の出身者の割合が他の地方州出身者に比べてかなり高いことが判明した。

以上のような数値的傾向はオスマン帝国

近代史においていかなる意味を持つのか考察を行った。まずオスマン帝国の歴史上、海軍・海運におけるルーム(ギリシア系臣民)の重要性、次に黒海沿岸地域が黒海交易港、漁港、海軍の軍港(造船所・ドック)として果たしてきた役割を確認した上で、ギリシアの独立が招いたオスマン海軍・海運における主要アクターとしてのルームの人材の大量の喪失を、ムスリムによって埋めるにあたって重要な役割を果たしたのが黒海沿岸地域の人々であったことを実証するに至った。

(2) 海運史料にみるオスマン帝国末期の社会変容

オスマン帝国官営汽船会社の『給与台帳』を基本史料としてオスマン帝国末期の動的な社会変容を考察することを試みた。

まずトルコ海運公社が所蔵する膨大な数に及ぶ『給与台帳』の全体像を把握するために、オスマン帝国期に該当すると思われるすべての台帳を閲覧し、その内容を分類・整理して、どのような情報が得られるのかを把握した。

この予備調査をもとに、オスマン帝国期の129冊の台帳から、スルタン・アブデュルハミト2世の治世下で官営汽船会社として活動した「特別局」の汽船乗組員に関する台帳を26冊とその後の「オスマン海運局」期の台帳を3冊、計29冊を選び、台帳ごとに汽船名、のべ就労人数、職種、出自のデータを収集し、出身地域、ムスリム・非ムスリムの別、外国人の数および全体に占める割合を集計した。これらのデータ・ベースから以下のようなことが見て取れた。

①汽船乗組員の出身地域は首都圏であるイスタンブル出身者が28%であるのに対し、黒海沿岸2州(カスタモヌ、トラブゾン)出身者は51%と半数を占めている

②出身地域別割合の経年変化をみていくと、首都圏出身者は19世紀末にかけて増加の傾向をみせるが、20世紀に入ると減少に転じている。黒海沿岸地方出身者は19世紀末までわずかに減少傾向をたどるが、20世紀に入ると増加し始め、特にオスマン海運期にその傾向が強まる

③外国人船員の割合は、特別局設立時から急速に減ってゆき、20年間でほぼゼロとなる。非ムスリムの割合も外国人ほどではないがかなり減少している

以上の結果とオスマン帝国末期の政治的社会的動向との関連性を考えると、①②については、ムスリムと非ムスリムの人材を適材適所に配することで繁栄を共有し活性化してきたオスマン社会が、19世紀以後の領土の喪失によって、非ムスリムの人材を多く失い、例えば海洋活動のような従来非ムスリムの果たす役割が大きかった領域においても、ムスリムの人的資源の活用にシフトせざるをえなかったことを示している。ただそのテンポに緩急が見られるのは国内的には政治的な要因が、国際的には世界経済システムにオスマン帝国が取りこまれたことによる影響等が考えられる。③については対英関係の変化とアブデュルハミト2世のパン・イスラーム主義政策との関連性を指摘することができよう。さらに、本研究が明らかにした海運関係者の出自の傾向から地中海世界帝国としてのオスマン帝国からは、アナトリア領域国家としてのトルコ共和国への変容のプロセスの始まりを看取することができる。

(3) オスマン帝国における経済ナショナリズムの萌芽について

本研究はパーソナルヒストリーの集積からオスマン社会、とりわけ民衆の「くらし」や「まなざし」を照射しようとしたものであ

るが、当時の庶民の心情を理解する上で世論にも注目した。世論の動向を探るために、19世紀末から20世紀初頭にかけて発行されたオスマン語新聞の論説、特に本研究が海事に関係することから、海運関係の論説を収集し、分析を行った。

『マールーマート』、『サバフ』、『テルジュマーニ・ハキーカト』といった当時のイスタンブールの主要日刊紙の海運関連の報道は次二つの論題に集約される。一つはオスマン帝国の海運界が外国資本に圧倒されていることへの不満、もう一つは非ムスリム海運業者への批判である。この両者は共に「ムスリム・トルコ資本待望論」に結びついていく。

ここで明らかとなったことは、トルコ・ナショナリズムは、青年トルコ人政府による上からの政治的ナショナリズム以前に、反外国・非ムスリム資本という経済ナショナリズムという形をとって現れたことである。その要因は、マクロなレベルではオスマン帝国が世界経済システムに抱摺された結果であるが、本研究の成果はミクロなレベルでは庶民が日々の生活において外国資本や非ムスリム資本の浸透を感じとり、「彼ら」に対し「我々」というものを意識するようになった、すなわち「愛国心」が芽生えたことによることを提示した。

(4) 本研究の成果を総括する。本研究は、オスマン帝国がその末期、特に海洋活動において「地中海性」を喪失し、アナトリア沿岸地域、特に黒海沿岸地域の比重の増加が顕著であったことを明らかにした。すなわち、19世紀から20世紀初頭に、地中海世界帝国としてのオスマン帝国からアナトリア領域国家としてのトルコ共和国への約1世紀間に及ぶ長い変化のプロセスと両者の連続性を見出すことができるのである。

また、オスマン帝国史研究は支配者としての「ムスリム・エリート集団」と「非ムスリム・マイノリティ」を中心に展開してきた感がある。本研究では、これまで等閑視されてきた「ムスリム・マジョリティー」に焦点をあて、公文書には現れない彼らの生活の実態を明らかにし、その心情を読み取ろうと試みた。海運関係者というごく限られた人々ではあるが、ある程度目的を達成したといえる。

さらに、オスマン帝国末期とトルコ共和国との連続性の議論への参画という点でも、政治的トルコ・ナショナリズムが支配エリート層や知識人層から提起される以前に、民衆の中で素朴な「愛国心」と共に「経済的ナショナリズム」の原形ともいえる感情が芽生えていたことを明らかにしたことで、オスマン帝国末期に国民国家形成の素地がすでに民衆レベルにおいても醸成されていた可能性を提示することができたと考える。

これらの成果はトルコでの学会発表や雑誌論文によってトルコ人研究者にも理解され、共著刊行の準備を進めている。本研究で発掘したオスマン海運の人事関係史料群は膨大な数にのぼるため、期間内にそのすべてをデータ・ベース化することができなかった。今後の課題としてこの作業を継続し、パーソナル・ヒストリーの集積から「ムスリム・マジョリティー」の実像を解明する研究を進展させたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 小松香織、海運史料にみるオスマン帝国末期の社会変容、イスラーム地域研究ジャーナル、5 巻、2013、43-50
- ② 小松香織、オスマン帝国の経済ナショナリズムに関する一考察、東洋史研究、査読有、71 巻 1 号、2012、1-35
- ③ 小松香織、オスマン帝国末期の海洋活動

と黒海沿岸民、歴史人類、査読有、38 号、2010、1-23

[学会発表] (計 2 件)

- ① Komatsu Kaori, Osmanlı İmparatorluğunda Vapurculuk ve Milliyetçilik, The First Global Conference on Innovation in Marine Technology and the Future of Maritime Transportation, November, 2010, Istanbul, Istanbul Technical University
- ② 小松香織、海運史料にみる近代オスマン社会の変容—オスマン帝国末期の海運と黒海沿岸民、日本オリエント学会第 50 回大会、2008、筑波大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小松 香織 (KOMATSU KAORI)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授
研究者番号：10272121